

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 若林幹夫「メディアの中の声」（『PANORAMIC MAGAZINE is』No. 58 ポーラ文化研究所 1992年12月）の一部を抜粋（約3,500字）して出題した。電話やラジオ、テレビといった20世紀のコミュニケーション・メディアを通して声を聞くという経験がいかなるものかを述べた論考である。電氣的な複製メディアによって、言葉としての声が内に孕んでいた隔たりを顕在化させることを指摘し、声が生産・流通されていくときの身体感覚は「私」の主体性が揺らぐような経験であるという視点を提示する。

本文で挙げられている事例はやや古い音声メディアだが、近代的な認識の枠組みを対象化・相対化する論理の展開は標準的なものであり、基本的かつ正確な内容理解を問う問題であった。また言葉や声という普遍的な切り口から「私」の身体感覚や経験を捉え直していく構成と展開は受験者にとっても身近な問題と捉えられるはずであり、現代のメディア環境について応用的に考える力について問うことも目的とした。問1は漢字問題、問2～4は本文の読解に関する問題、問5は文章の構成と展開についての理解を問う問題とした。問6は本文を読んだ後に生徒が本文の内容を読み直し、問題提起の部分を読み手により伝わるように具体的な内容に修正するという場面を設定し、自分の考えを効果的に表現する力を問うている。内容と難易度は大きな問題はなかったと判断できる。

第2問 室生犀星「陶古の女人」（初出『群像』1956年10月、出典は『室生犀星全集 第十巻』新潮社、1976年8月）より出題した。また、柳宗悦『『もの』と『こと』』（初出『工芸』1939年2月、出典は『物と美 新装・柳宗悦選集8』日本民芸協会、1972年7月）を、設問内の副素材として用いた。骨董を愛する「彼」のもとに、ある青年が持ち込んだ青磁をめぐって、青磁の魅力や青年とのやり取りに感う「彼」の在りようが描かれる場面である。登場人物の心理が交錯する、動きの多い場面であり、殊に「彼」の複雑な思いを読み取ることが求められる。

問1は、「彼」が持つ欲望の内実や特徴を把握する問題で、これ以降の展開の起点となる。問2は、「彼」がいかに青磁に感動しているかを表現の特色から考えさせる問題である。問3は、青年の様子を見て「彼」が思い込んだ内容とその時の「彼」の心情を問う問題である。問4は、青年に対する「彼」の理解の内容を問う問題。問5は、「彼」が自らの欲望と正義感との葛藤を客観的に捉えるさまを問う問題。問6は、副素材の読解を踏まえると「彼」の態度をいかに相対化できるのかを問う問題である。問4は、「彼」がいかに青年を理解しているのかを尋ねており、シンプルな心情把握問題ではない分、傍線部に至るまでの青年の態度の変化と「彼」の内面の揺れ動きとを関連させて読み取る必要がある。

登場人物の心情や視点を本文の表現に即して読み解く力を識別できる問題だったといえる。

第3問 出題した『蜻蛉日記』は10世紀後半に成立した藤原道綱母による私日記で、主に夫の兼

家との結婚生活が記されている。当該箇所は、療養に向かった山寺で作者の母が死去し、その場で葬送をすませたあとの場面である。平安時代の標準的な和文で単語・文法ともにさほど難しいものはなく、受験者の基本的な学力を問うのに適切な素材であった。問4で異なる文章を用いたため、『蜻蛉日記』自体の分量は1000字程度である。

問1は本文の読解に必要な基本的な単語・文法の知識を問うことを意図した。目新しい問題ではないが、こうした基本的な力を問うことの必要性が改めて確認できた。問2や問3は、文脈をおさえた上で登場人物の行動や心情が把握できているかを問う問題である。いずれも難易度は適正であった。問4(i)は単語・文法の基本的な知識を問う問題であったものの、一見それらしい説明である「前栽」を選択してしまった受験者が目立った。問4(ii)はセンター試験と異なる新傾向の問題である。『蜻蛉日記』中の和歌と『古今和歌集』853番歌という異なるテキストを比較することで深い文脈理解に到達できるかということ問うた。やや難易度を高めに設定したが、結果として受験者の実力を適切に測定できる問いであった。問5は、古文特有の単語・文法について、機械的に知識を問うにとどまらず、表現効果まで理解できるかを問う問題である。難易度は適切であった。

第4問 蘇軾の史論と『旧唐書』を用いた複数素材問題とした。蘇軾の史論は、主君に対する本当の忠義とは何かを論じたものである。主君の歓心を買うことばかりが忠義ではないとする蘇軾の見解は、時代を超えて普遍的な意義を持つと考へての出題であった。また史論の中では、理想的な忠義を体現した人物として魏徴に言及されるため、魏徴についての記事を『旧唐書』から取り上げ、これを【資料】として参照しながら史論の理解を深めることを目指した。

字数は、蘇軾の史論が156字、『旧唐書』は48字、両素材を合わせて204字（いずれも句読点を除く）であった。複数素材問題としてはやや多めではあるが、過去のセンター試験では文字数を200字前後としてきたことに鑑みれば、許容範囲内である。

問1は漢文の基礎的な力である漢字の意味を、文脈に即して適切に読み取れるかを問う問題。問2は、複数の句形のなかから文脈上最もふさわしいものを選ぶ問題。問3は文脈と句形の理解を中心に、傍線部の解釈を問う問題である。問4は、漢文の返り点の付け方とその書き下し文を問う問題。問5は、【資料】を理解したうえで、それを踏まえ本文傍線部の解釈を問う複数素材問題。問6は文章全体の理解を、傍線部をもとに問う問題である。

複数素材による出題であったが、共通テストにふさわしい問題であったと考えられる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 本試験と比べ文章の抽象度が高く、リード文が用語の説明を含み多少読みづらかったものの、具体例を用いながら抽象的な概念について順序立てた説明がされており、論理的な文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認する上で適切であったと評価された。問6について、学習場面を設定することは指導要領の方向性にも合致しており、生徒の考察をまとめた文章は高校生の実態をよく反映していると評価をうけた。一方で、本文と切り離された「生徒の文章」の内容を理解することに時間がかかったとの意見も寄せられた。高等学校国語科における充実した学習活動の実践につながるよう、今後もより良い設問を工夫することが必要である。

第2問 文体が少々古く、注が多いという指摘もあったが、「彼」の内面が青年とのやり取りの中で丁寧に描写されており、心情の変化の把握を中心に、文学的な文章を的確に読み取る力を確認することのできる適切な素材文であったという評価を受けた。また、本文および設問中の【資料】、【話し合いの様子】について、題材と文章量ともに適切と評価された。言語活動場面を設定し、複数の異なる資料や他者の考えを踏まえて考える力を見ようとした問6については、本

文の理解を深める学習場面が設定され、問題作成方針に合致しており、また、受験者にとっても問5までの問いがきちんとできているかを確かめる問題として難易度も適切であると評価された。総じて、学習指導要領において育成を目指す資質・能力について、その達成の程度を判定する試験問題として適切であったと考える。

第3問 題材、文章量、難易度、配点ともに適切であるとの評価を受けた。出題内容についても、共通テストの問題作成方針に沿っており、適切なものであるとの反響があった。なお、問1の語句問題については、内容が単純なのではないかとのコメントもあったが、基本的知識を問う設問として適正であったと思われる。また、新傾向の問4(ii)については、今回の設問が適切だったとの好評価のうえで、今後の作問に関しては、比べることありきで難易度が高まるだけにならないように配慮することが必要であるとのコメントもあった。作問側の問題意識とも一致するところであり、良問の作成を目指して引き続き留意したい。

第4問 素材文の内容と分量、設問および難易度について、概ね肯定的な評価を受けた。複数の素材を用いた出題に関しても、問題作成方針に合致するものであるとの評を得た。他方で、問2、問3、問4は句形を問う問題に偏っており工夫が必要との意見があり、また複数素材問題である問5(i)・(ii)の選択肢については、正答に紛れはないものの、わかりにくい点があるとの意見もあった。問2、問3、問4については、句形が重要であることはもとより当然だが、その知識のみで正解できるような問題とはなっておらず、意見は必ずしも当たらないと考えている。また問5に関しては、問うべき力を図る上で適切な問題であったと思われるが、選択肢のわかりやすさには引き続き留意していきたい。今後とも、素材の単数・複数を問わず、難易度や配点などの諸点においてバランスのとれた出題を目指していきたい。

4 ま と め

第1問 学習指導要領では、言語を手掛かりとして文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力が求められている。高等学校において、言語活動を重視し、思考力、判断力、表現力に結びつく学習が目指されていることなどに配慮して、出題に当たっては学習場面を想定した設問を行うなど工夫した。今後も高等学校における国語科の学習過程を踏まえつつ大学教育に求められる基礎的な能力にも注意を払いながら、素材の吟味と、設問の内容および形式について工夫を重ねることが必要である。

第2問 登場人物の心境の変化や、欲望と正義感がせめぎあうさまを丹念に読み取ることを出題意図とした。本素材は文学的な文章を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であったと評価された。設問に関しては概ね適切であったと考える。第2問で比べ読みの問題を設定する場合、本文と資料の比重の置き方に配慮しつつ、本文の核心部分についての読みが深まるような問いにすることが必要となる。良問作成のために、今後も引き続き検討課題としたい。

第3問 基本的な単語・文法の知識を活用しつつ、文脈をふまえて解釈する力を問う設問や、複数のテキストを比べることで和歌の深い理解を目指す設問など、高校における古文の学習成果を適切に評価できるような作題となった。今後も入念に素材を吟味するとともに、各問の問い方やリード文の工夫などによって解きやすさを担保し、受験者の思考力・判断力・表現力等を適切に測定できるような作問を心がけたい。

第4問 漢文問題は、素材文の分量や注の付け方、また各設問の調整により、受験者が取り組みやすくなるよう配慮を重ねてきた。今後も良質な素材文を探し出し、慎重な配慮のもとで作問し、学習指導要領をはじめとする社会の要求をもふまえながら、知識と思考力・判断力・表現力等をふたつながら問う出題を目指してゆくことが求められる。重ねて、高校の授業改善に資するような出題も心がけていきたい。